



## 瀬戸内海の地形と景観について

### (1) 瀬戸内海の地形について

★瀬戸内海(多島海)の原型は、地殻変動により、紀伊水道、鳴門海峡、豊後水道、関門海峡の決壊、及び地盤の浮沈や、氷河の溶解による海面上昇などが加わって、低湿地帯は大海原となり、高地は大きな島となり、谷間は島を分断する「瀬戸」に、小高い丘や小山は、大海原に点在する小島となって出来上がったと言われていま

す。  
それに潮流や風波による造形作用が加わって浸食崖や、崖から切り離された奇岩や小島が散在する海岸線、浸食により削られた「土砂が堆積した砂浜」が交互に存在しま



★そんな島々に挟まれた狭隘な海域は「海峡」、大きな島に挟まれた川の様な海域は「瀬戸」、大海原は「灘」と呼ばれます。「海峡」では潮流が巨大な渦を巻き、細長い「瀬戸」では大河が島々を取り囲む様に流れます。

瀬戸内海に浮かぶ無数の島々は、大きさも形も様々で、或る所は一直線に、或る所は無秩序に、或る海域では密に、或いは疎に・・・東西500km、南北20～50kmにわたって展開しま

す。  
その数は、“島”と名のつくものだけで 約730個、〇〇岩とか、〇〇石も含めれば、3,000とも8,000とも・・・数え切れません。ここ(船上)から見る「呉湾」は、そんな瀬戸内海の一部に過ぎませんが、しかしそんな瀬戸内海の全貌を想像する材料は揃っています。

### (2) 瀬戸内海の景観、

★瀬戸内海には、⇒◆緑の島々に囲まれた大小“湖”の様な景観、⇒◆島々の斜面に広がる段々畑、⇒◆沖合のキラキラ輝くさざ波をかき分けながら進む船影、⇒◆波静かな鏡の様な水面にくっきり映る「松の木の緑と白雲」のコントラスト、⇒◆沖をゆく船舶や遠方の小島が海面上にくっきり浮かび上がる「浮島現象」・・・等々

それに⇒◆朝日や夕日が輝き、四季折々の風物が一体化してバラエティに富む景観が各所に形成されます。

呉湾周辺の島々、とびしま海道・しまなみ海道・・・等々、何れも「芸予諸島」に属し、比較的大



きな島々が密集しています。従って、島々の狭間は運河が糸を引く様に連なり、かつては村上水軍の活躍場になっていました。しかし現在は壮大な架橋で結ばれ、一層迫力のある現代版の「瀬戸内風景」に変貌しています。

そんな島と島の狭間は、渦巻く流れを喘ぎながら進む上り船と、それを嘲笑う様に走り去る下り船が、分刻みで出会う場所になっています。因みに音戸の瀬戸は、四六時中「約1.5分毎に1隻の船舶」が航行する過密航路になっています。

瀬戸内観光の醍醐味は、そんな次々移り変わる景色を眺めながらくつろぎの時間を過ごすクルージングと、高台(展望台)からの眺望は「大規模箱庭」というか、多島美の立体模型が楽しめます。呉近辺の眺望ポイントには、灰が峰、休み山、野呂山・・・等々があります。

### (3) 瀬戸内海の”製塩業” (竹原・三つ子島)

🚩江戸時代の海上交通網は、日本海側(北前船)を手始めに、太平洋や九州周り航路も着々と整備され、生活資材はもとより、人も情報も、全国あまねく行き交いました。

その中で瀬戸内沿岸の代表的産物としては、”塩”が送り出されていました。勿論、”塩”は人の生命維持には究めて貴重な産品です。大規模な「製塩法」は、江戸時代以降、広大な砂浜に潮の干満差を利用して海水を引き入れ天日乾燥する【入浜式製塩法】が、赤穂藩で開発され瀬戸内全般に広まったとのことですが、それは昭和時代に入っても戦後まで続いていました。

🚩しかしそれは大変な労力が必要で、世界の交易システムが整うと、手っ取り早い『岩塩輸入』にシフトしました。そして化学技術が進歩し、プラスチック原料などに需要が急増した昭和30年代に、塩田は完全に姿を消しました。

現在は、専らメキシコからの『岩塩輸入』に頼っており、日本中の需要の90%以上は、呉湾内の三つ子島から再配送されているそうです。しかし(従来100%だった)食用は僅か数%に過ぎず、殆どは塩化ビニルなどのプラスチックや、洗剤、ゴム、ガラス、ソーダ工業など工業製品の原料になっています。しかし塩田オーナーやその有力者たちは、相当な地位を得ていた様です。呉近辺では竹原には超豪華屋敷が建ち並び、「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。



### (4) 「日本歴史」の中の呉周辺風景

🚩ところで自然景観の絶景スポットは、瀬戸内海に限らず日本中には無数存在しています。しかし瀬戸内(呉近辺)の風景は、日本歴史と深く関わっているのが特徴で、そんな歴史跡や街並みをセットで見学すれば、もっと興味深い発見があります。

島々を包む様に流れる潮流は、かつて風まかせ潮まかせの航行船舶にとって大変な難所で、水軍氏族にとっては、水先案内など絶好の活動場になっていました。

しかし時代が江戸時代に移り、社会が安定化すると、日本海側の食料や生活物資を人口密集地の京都や大阪に運ぶ北前船の経路となり、大量の物資と共に人や日本中の情報・文化を流通させ、百花繚乱の庶民文化を開花させました。

しかし明治時代になると急速に機帆船、鉄道など陸上交通露、電信・電話などが出現し、北前船は次第に役割を終えました。

しかしそれと引き替えに、呉周辺は急速に軍事色が濃くなってきました。そして海軍鎮守府が設置されると、早くも数年後には日清戦争が勃発し、その10年後にはまた日露戦争も勃発しました。それに何れも勝利すると、**呉海軍工廠**の艦船建造が軌道にのり、呉湾に浮かぶ艦船数は日増しに増加し、**呉軍港**は「東洋一の軍港」に成長し、やがて世界の戦艦”大和”をも建造し、太平洋戦争終結まで日本海軍の最重要基地になっていました。



そうして培われた軍事技術は、「世界大戦」という未曾有の悲劇と引替えに、戦後しっかり活かされ、**呉市一帯**は重工業地帯に発展しました。

また、瀬戸内沿岸の、(当時)燃料廠跡は巨大コンビナートに転身し、不夜城となって夜の海を照らし、その周りは無数の工場が取巻く大工業地帯となり、日本は世界第二位の経済大国に申し上がりました。そして現在、瀬戸内海の狭い海峡や水路は、超大型船もひしめく「超過密航路」になっています。

